

平成25年度宇治市小中一貫教育推進協議会会議録

会議名	平成25年度第1回宇治市小中一貫教育推進協議会
日時	平成25年7月17日(水) 17時30分～19時30分
場所	宇治市生涯学習センター 第2ホール
出席者	<p>(委員) 榊原会長 江口副会長 小池委員 部委員 吉田委員 田邊委員 伊家委員 荻野委員 小谷委員 鵜飼委員 大槻委員 上田委員</p> <p>(事務局) 石田教育長 中谷教育部長 藤原教育部次長 山下教育改革推進室長 上道学校教育課長 富治林小中一貫教育課長 市橋教育指導課総括指導主事 海老瀬小中一貫教育課総括指導主事 久保小中一貫教育課企画調整係長 米田学校教育指導主事 佐々木小中一貫教育課企画調整係主事</p>
欠席委員	下山委員
配布資料	資料 平成25年度第1回宇治市小中一貫教育推進協議会資料 平成25年度中学校ブロックジョイントプラン 平成25年度「宇治学」実施計画(案) 平成25年度「いしずえ学習」実施計画(案)
1 開会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・石田教育長 開会挨拶</li> <li>・各委員自己紹介</li> <li>・事務局紹介</li> <li>・設置要項に基づき副会長に江口委員を選出 江口副会長挨拶</li> </ul>
2 報告及び協議事項	<p>(1) 報告1 平成24年度本会の活動概要報告 資料(6頁)に沿って事務局より説明。 質疑応答等 特になし。</p> <p>(2) 報告2 全面実施の到達状況 資料(7頁～)に沿って事務局より説明。 (会長) 小中一貫教育を安定的に進めていく必要があると感じている。小・中学校間の授業の共同研究・実施が行われているが、小学校・中学校間のギャップを今後どのように改善し進めていくのか。</p>

(事務局)

本市の小中一貫教育のねらいとして、系統的・継続的な学習指導・生徒指導がある。これは、小学校においては卒業後を見通した指導、中学校においてはこれまで歩んできた小学校の段階を踏まえた指導であり、小・中で同じことをするのではなくそれぞれの発達段階に応じた指導を9年間を見通して行うことである。これを基本的な視点として、研究・試行段階を経て小・中の教員の積極的な交流が行われている。授業研究についても、かなり進んでいるブロックもある。今後、市教委としては、これまでが参観ベースの授業研究であったならば、これからは事前・事後研究を行い小・中の教員がそれぞれの専門性を活かして中身の充実を図った研究協議を行い、真に授業力向上に繋がる授業研究を進めていってほしいと考え、今年度の到達目標の重点としている。

(会長)

昨年度の実施状況というのは今後の小中一貫教育に繋がっていくものだと思うが、学校側としては、どのように評価しているか。

(委員)

昨年度が宇治市での小中一貫教育全面実施初年度ということで、各ブロックが十分な準備を行い、全面実施を迎えることができたのではないかと思う。ただし、小中一貫教育の取組にとってもないエネルギーを使ったという事実もある。小中一貫教育を息長く続けていくために、各ブロックの年間計画などをしっかり立てていく必要がある。その上で各ブロックの特色や新しい要素を加えていかななくてはならないと考えている。

(委員)

授業研究というテーマは今年度の宇治中ブロックの課題としても挙げている。しかし、それぞれの学校が過去に積み上げてきたものがあり、共同研究という面では試行錯誤しながら取り組んでいる。

### (3) 報告3 今年度本会の活動について(案)

資料(9頁～)に沿って事務局より説明

(会長)

学校訪問について、何か意見はないか。

(委員)

委員としては、実際に現場を見にいけるといのは、とても良い取組だと思う。受け入れる側としては、いつでも見に来ていただいて結構です。

(委員)

私は昨年度学校訪問をさせていただいた。学校によって取組が違い、地域の環境も違う中で学校訪問は大変良い勉強になった。通常業務で他校の授業を見るということは中々できない。他ブロックの授業を見て自校のブロックと比較していくということを行うために、学校訪問を今年度も実施していきたい。

(委員)

私は、一年目に小学校、昨年度は中学校を視察させていただいた。小学校では中学校の先生が教えているところを、中学校ではその小学生だった子どもが教わっているところを見ることができ、小・中の繋がりというものを確認できた。百聞は一見にしかずというが、まさにそのとおりでよい取組だと思う。

(委員)

私は、昨年度研究会を視察させてもらった。これ自体はよかったが、学校訪問についての環境は考えてほしい。いくら気軽にいけるといっても自分と関連のない学校についてはやはり気構えてしまう。不審者対策との兼ね合いもある。腕章を作るなど、本当に気軽にいける環境を作ってほしい。オープンスクールなどの催しを行っていただくとより足を運びやすいと思う。

(会長)

これについては、技術的な問題なのか、宣伝力の問題なのか考える必要がある。委員用のパスポートを作るなどは面白い試みかもしれない。

(委員)

コーディネーターが配置されたことで、教師間の連携はよくとれていると思う。また、チーフコーディネーター後補充も配置されているので、これによってできた時間も活用して、より多くの授業視察を行いたいと思う。

(委員)

昨年度は、準備段階から授業、事後研究までを通して視察させていただいて、紙ベースではわからない部分を見ることができ、非常に有意義だった。

受け入れる側としては、例えば来校者証をしていたとしても、それは不審者でないという証明であって、突然授業見学に来られても子どもたちが不審がってしまう。子どもたちの準備のことを考えても突然の来訪というのは難しいものがある。

(事務局)

現場視察については、実際に子どもたちを見ることによって様々なことが分かるということ認識した。方法の問題としては、まず事務局としては情報をできる限り提供していくことが重要であると考え。例えば、各委員に授業参観の日程を伝えるということ。授業参観の日であれば、多くの保護者がいる中で委員も同様に参観することができ、また学校側の負担も少ない。技術的な問題については、ネームプレートを作る等の方策を考えていきたい。また、オープン参観以外の日程で視察を行いたい場合には、事務局として学校と委員の間に入って調整を行いたい。これらのことを通じて、より気軽に授業の視察を行っていける環境を作りたい。

(会長)

様々な意見がでたとと思う。これらを踏まえて昨年度から継続して、今年度の本協議会として小中一貫教育の取組に関する進行管理を行うことを中心とするということを確認したい。そのためにも今回を含めた2回の協議会と2学期に予定されている取組視察をしっかりと進めていきたいと思う。

(4) 報告4 中学校ブロックを単位とした取組について

資料(10頁～)に沿って事務局より説明

質疑応答等

特になし。

引き続き、各ブロックの今年度の取組について説明

(委員) 黄檗中学校ブロック

本校は、年次積み上げ方式により開校し、本年度で2年目である。1～8年生までの1,047名の児童生徒がおり、小学校25学級、中学校9学級の合計34学級で教員数は74名となっている。2年目を迎えて、昨年度とは大きな違いがある。1つは施設がすべて完成したことである。昨年末に体育館、本年度にはグラウンドが完成した。2つ目は中学校部分が2学年になったこと。これは小中一貫教育に係る後期ステージの生徒がでてきたことになる。また、中学校部分について先輩後輩の関係もできた。3つ目は学校運営について、保護者からアンケートや教職員の1年間の振り返りを踏まえて手直しを行った。例えば、体育大会については小・中別に実施して相互に乗り入れるようにした。教職員の組織については、教育相談や特別支援に係る改善を行った。

2年目も1学期を終えたところであるが、エピソードを1つご紹介したい。6月14日に学園会(児童会+生徒会)を実施した。その日は全校生徒の半分にあたる5～8年生が参加した。どんな学校生活にしたいか、どんな黄檗学園にしたいかの意見交換の場として開催した。5年生からは元気で綺麗な学校にしたい、6年生からはけじめをつけて上級生らしく行動していきたい、7年生からは学年でまとめられる取組をしていきたい、8年生からは服装を正していく必要があるということや1年生も含めた全校で掃除していきたい(黄檗学園の1年生は掃除がない)というような意見があった。これに加えて6年生の児童が1～4年生の学級に意見を聞きに行った。そこでは、宇治黄檗学園では上級生が非常に良くしてくれるという意見が多く出た。私の目から見ると、児童生徒みんなが宇治黄檗学園をよくしていこうという意気込みが感じられた。

このような状況の中で、昨年度から引き続いて、1つめには安全を確保していくこと、2つめには小・中学校教員の協働体制を構築していくこと、そして卒業後の希望進路を実現する指導を行っていきたいと考えている。

しかしながら、宇治黄檗学園にもいじめをはじめとした諸問題がある。それらも踏まえた上で、宇治黄檗学園では本年度の運営目標を「時間のゆったり流れる黄檗学園」を目標として掲げた。子どもたち1人1人しっかりと向き合っていじめをはじめとする諸問題を解決したい。また、基礎をしっかりと教える学習指導を行うためにも子どもの体内時計で時間が流れる宇治黄檗学園にしたいと考えている。

(委員) 横島中学校ブロック

横島中学校ブロックについては、小中一貫教育に関わっての教職員の交流や取組、児童生徒の交流、地域家庭との連携の中で進めていく取組などは年間計画の中で作り上げられている。そこに新しい要素を加えることで、子どもたちの姿に小中一貫教育の成果が見えてくるような取組に改善していきたいと思っている。特に新たな取組として今年度行うものについて、例を上げさせていただく。まず、昨年度は公開授業の事後研究会については全教員が関わったが、事前研究等は一部の教員しか参加できなかった。今年度については、国語、算数、外国語活動を中心に北横島小学校の高学年の公開授業を柱に全員参加していくようにしたい。また、その合同研究授業を進めるにあたっては子どもの実態を踏まえることを大事にしたい。そのため、夏の全体の研究会では子どもたちの実態を3校から集めて、先生方全体に提起する研究会を行った上で各部に分かれての論議を行いたい。次に、小・中合同研修会は各ブロックで行っているが、小学校間の連携に特化して進めていくことも重要であると考えている。各小学校の良い部分を取り入れるため小・小合同研修会も行っていきたい。また、その中で小・小の合同学年会(全学年+養護教諭等)も行いたいと考えている。このような教職員間の連携を柱として子どもに還元できる様々な取組を進めていきたい。

(委員) 宇治中学校ブロック

宇治中学校ブロックでは9つの専門部会及び事務局に分かれ小中一貫教育の様々な取組を推進している。専門部会は昨年度の経過を踏まえ、中学校に担当していただいた方が効果的である部会は中学校に移すというようなことを行った。また、内容が似通っている部会については統合を行った。各専門部会は年4回のブロック合同研修会でそれぞれの小中一貫教育の課題について研究する。小・中合同ブロック研究会は今年で3年目となり、今年の第1回を5月9日に実施した。その様子を宇治中学校区小中一貫教育校だよりの裏面に掲載している。このたよりは宇治中学校区の小・中学生に配布している。次回の合同研修会は8月21日に実施する予定であり、この夏季の研修会では毎年全体研修会を実施し、今年度は「中学校が大切にしていること」を各教員が共有していくため、大越校長(宇治中学校)に講演していただく。

今年も宇治中学校の小中連携教員に外国語活動の授業支援をしていただいているが、中学校の先生が小学校に乗り入れることにより児童は中学校をより身近に感じているようである。この様子も小中一貫教育校だよりに掲載している。

昨年度よりチーフコーディネーターを担当しているが、昨年度は合同研修会をはじめとする全体的な取組の計画立案や小中一貫教育校だよりの発行などは行うことができたが、ブロック内の各校を訪問するということはあまりできなかった。本年度は、より小・中および小・小連携をアピールしていくため、週1回は各校を訪問し、訪問校ではできるだけ多くの先生と交流を行っている。宇治中ではふりスタを毎週火曜放課後に実施しているがこれに参加した。また菟道小で美化作業や授業参観などにも参加した。今年度は、教員が他ブロックの授業をもっと参観していけるようにしたい。これは、難しい部

分もあるが各校に案内をだして参観しやすい環境を作っていけるよう取り組みたい。各校へ行った際は、自分が小中一貫教育の要であるという自覚を持ちながら、より多くの児童・生徒・保護者に声かけを行いながら活動を行っていきたいと思っている。

(委員) 南宇治中ブロック

まず重点課題としては2点あり、1つは児童生徒交流の充実を図る、もう1つは教科のつながりを重視した研修の充実を図るというものである。これによって、小学校から中学校に進学するときに生活環境や学習環境の変化に戸惑うことが少なくなるように、中1ギャップの解消を図れるように、小学校における指導を踏まえて中学校での指導を行っていきけるようにということを目指して取り組んでいる。具体的には小学校と中学校の指導を繋げるために、日常的には各教育部会に分かれての教員の交流、さらに年6回全体の研修会を行っている。全体研修会の中では、公開授業を実施してお互いの授業に参加することや、教科・領域によっては事前・事後研究を行っている。また、小中一貫教育の重要性やブロックでの課題も取り上げている。例えば、帰国外国人生徒の指導や卒業後の進路についてを課題として話し合っている。また、この内容を教職員向けの小中一貫だよりとして発行し、全職員への啓発に努めている。中学校には、小・中両方の授業を担当する小中連携教員が加配されており、昨年度からは理科の授業を担当されている。この加配教員の小中一貫教育に果たす役割は大きいと考えている。6月には、本ブロックの特色として環境教育を行った。ゴミ問題等を扱ったが、これをもとにして、小・中合同の美化ボランティア活動などの取組も行った。その他の小・中交流の取組として、小6の部活動体験や児童会生徒会の合同の会議やあいさつ運動や募金活動なども行っている。

また、これらの取組を保護者・地域にしっかりと広報していくということも重要な点と考えており、これまででもリーフレット等で広報していたが今年度に関しては、ブロック内の各校の校門前に小中一貫教育に係る掲示板を設置し広報を行っている。また南宇治中ブロックの小中一貫だよりについては推進費を広報費用として使わせていただいた。地域の課題はいろいろあるが、これまでそれぞれの学校が取り組んできた内容を繋いで整理してブロックとして特色ある一貫教育を進められれば良いと思う。

(会長)

これらの活動報告を踏まえ保護者の委員から何か質問はありますか。

(委員)

先生方がこんなに一生懸命取り組んでくれていることに驚いた。私は子どもが6年生で木幡中に進学予定だが、6月に中学校のフリーの授業参観に6年生を呼んでいただいて、児童本人が参観することで一貫教育というものを理解できたのではないかとと思う。このような取組はぜひ続けていってほしい。

(副会長)

学校は様々な小・中の取り組みを進めているが、それが見えない部分は多々あると思う。それを保護者に対して知っていただく発信力を強めていかななくてはならないと思っている。学校側も試行錯誤で進めている部分はあると思う。そこは、2年目ではあるが宇治市の目指す小中一貫教育を達成するため時間をかけて頑張っていかななくてはならないと考えている。

(5) 報告5 小中一貫教育に係る意識調査について

資料(15頁～)に沿って事務局より説明

質疑応答等

(会長)

調査項目は昨年度と同じであるということであったが、回答項目である適合度についても「そう思う」～「わからない」の5段階は昨年度と変わっていないのか。

(事務局)

昨年度から変更はしていない。

(会長)

この「わからない」にはどちらともいえないという意味と、わからないという意味の二つの意味が混ざってしまうのではないか。

(事務局)

確かにそのとおりである。このアンケートは小中一貫教育を進めていく上で、節々で実施を行うこととなっている。より小中一貫教育の進捗状況を把握していく上でより良い調査とするために、今いただいたような意見をだしていったほしい。

(委員)

「わからない」の手前に破線を引くなどしてはどうか。

(事務局)

この部分についての曖昧さはご指摘のとおりである。しかし、いずれにしても本調査は今年度については実施済みであるため、次回以降の課題とさせていただきたい。

(委員)

説明では、4～6年生を対象にアンケートを行ったということであったが、アンケート用紙を見ると1～3年生に対してもチェック欄がある。1～3年生に対してはアンケートを行っていないということで間違いはないか。

(事務局)

対象については小学生は4～6年生、中学生は1～2年生で間違いはない。これは、アンケート作成にあたってフリーソフトを用いているが、これを用いると4～6年生の欄のみのアンケート用紙を作れないという技術的な問題があった。

( 6 ) 小中一貫教育への期待と要望について

( 会長 )

以上で報告はすべて終了したが、今後の宇治市の小中一貫教育についての要望又はご意見を各委員からお伺いしたい。

( 委員 )

槇島中学校区には分散進学という問題がある。これ自体が小中一貫教育の妨げとなっているのではないか。北槇島小学校と槇島小学校との小中一貫教育への取組に対する温度差が生じないか心配である。

( 委員 )

地域の中への小中一貫教育の浸透が進んでいないという課題があると思う。研修会等も良いがNEXUSプランのフェスティバルなども開催して一般への周知を図っていったらどうか。

( 委員 )

この会議に参加させていただいて、3年目となるがとても密度が濃く良いものになってきていると思う。今回の会議で一般の方への小中一貫教育への周知が課題ということであるが、本当に事細かに発信していただいているということは間違いなく、このことは続けて行ってほしい。一般の方々が小中一貫教育の効果を実感できるのは、やはり子どもたちの変化を感じるしかない。それには、時間がかかるものであると思う。あえていうならば小中一貫教育をストップすれば、その良さを実感することはできると思うがそういうわけにはいかない。そういった意味でもこれまでやってきたことを継続して行っていただきたい。

( 委員 )

私は保護者側として、小中一貫教育のアンケートを答えた立場であるが、これがご近所の保護者と小中一貫教育の話をするきっかけになった。やはり学校まかせでなく保護者の立場としてもっと関心を持つように働きかけないといけないと思う。また子どもの学校での様子に興味を持ち、保護者についても小・中間の連携をすることで小中一貫教育が難しいことではないという理解を深めていきたい。

( 委員 )

初めての参加だったが、大変参考になる話を聞くことができた。小・小連携に関する課題や、小学生が中学校をフリーに参観できる制度などはとても勉強になった。こういった取組を自分のブロックにも取り入れていきたい。

( 委員 )

中学校には中教研(中学校教育研究会)、小学校には小教研(小学校教育研究会)がある。今年度、私は中教研の宇治学の担当をしているが、小教研の宇治学の担当から中教研に対して中学校の宇治学(総合的な学習の時間)はどのようになっているのかという問い合わせがあった。中教研と小教研も交流ができれば、より小中一貫教育にも役立っていくのではないかと思う。

(委員)

今年については、宇治中学校ブロックの各校にできる限り訪問できるようにした。そのなかで子どもたちに「先生なんでいてんの？」ということをよく聞かれた。参観日などは保護者からも同じようなことを聞かれた。そこでは小中一貫教育の関係でということの説明しているが、こういうことによって意識が変わっていくことが大事であると思う。この積み重ねの中で小中一貫教育が草の根レベルで広がっていくと思う。そういった意味でもチーフコーディネーターとして、中学校ブロックの顔として頑張っていきたい。

(委員)

先ほど委員から話があったように、小学校と中学校の教育研究会の橋渡しを小学校側の部長として進めている。教育研究会を含めて、いろいろな教育活動の取組をブロックごとの特色を出しながら小中一貫教育の視点に繋いでいくことが重要であると思う。今後もいろいろな切り口から小中一貫教育の取組を進めていけたらいいと思う。

また、チーフコーディネーターとして小中一貫教育に関わっていくなかで、分散進学があることによる労力の増加は明らかである。これを解消できれば、小中一貫教育がさらに推進されると思う。

(委員)

小中連携から小中一貫教育に変わったことを自然に実感できる形にもっていかなくてはいけないと思っている。最初に小中一貫教育ということでアドバルーン的なことを実施して、小中一貫教育が一時的なことになるようではいけない。そのため、できるだけ自然な形で継続できて実感できる形をとらなくてはいけないが、これは中々難しい。例えば本ブロックでいえば数学の先生が小中一貫教育のコーディネーターとして授業にこられるが、週にこられる時間が限られており、小学校の子どもたちには定着しにくい面がある。自然なレベルでいえば広野中学校へ進んだOBなどが小学校へ金管を教えに来てくれたりする。これは、自然発生的なものであり、こういった部分も広めていければよいと思う。

(委員)

2つある。1つはブロックごとの特色を打ち出すということであったが、この雰囲気は出てきているのではないかと思う。例えば、南宇治中ブロックでは環境教育を行い、広野中学校では家庭学習の推進を行っている。この中で、それぞれのブロックの特色が鮮明になるような方向目標を持ちたいと思った。2つめは、授業研究を用いて、1単元あるいは1教科についてよりよい授業を作る実践は行っているが、これを到達目標にある「その内容を日々の授業に取り入れる」という部分が今後の課題ではないかと思う。この点についてしっかり頑張っていきたいと思う。

(副会長)

小中一貫教育というのは9年間で地域と地域の小・中学校で育てていくというものだと思っている。そのなかで、やはり地元の中学校へ進んでほしいという思いがある。小中一貫教育が進むなかで、地元の中学校へ進む生徒が増えてきた(以前は私学へ進む子

どもも多かった。) ある姉妹のお子さんのいる保護者から、妹は南宇治中学校へ通うのを楽しみにしているという声をいただいた。姉については南宇治中学校へ通わせるのが不安だったので私学へ通わせたということだった。しかし、妹に関しては安心して南宇治中学校へ通わせられるということであった。これはうれしい意見であった。全体としても中学1年生で私学に行く子どもは非常に少なかった。このことから、地元の中学校に進むということは小中一貫教育のひとつの成果といえるのではないかと思う。もう1つの意見として、不登校傾向のある子どもの保護者の方から、教科連携教員がいることで中学校へいっても知っている先生がいることもあり、子どもを安心して中学校へ送り出すことができ、欠席もほとんどなくなったということを知った。これも中1ギャップが軽減された成果ではないかと思う。

(会長)

定着していくということは、空気・雰囲気というものも大事であると思う。もちろんシステムが下支えすることは間違いないが、小中一貫教育を肌で感じることができるようになれば、これは楽しみなことだと思う。

それでは、他に特に意見がなければ本会を終了させていただきます。

(事務局)

今後の推進協議会の日程について簡単に説明。

### 3 閉会

・中谷教育部長より閉会の挨拶